
妖幻抄 8章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 8章

【Nコード】

N0998A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

明は、時折感じる不調に悩まされていた。『風邪を、ひいてしまったのかも知れない』明は、自嘲気味に呟いた。『妖幻抄 8章

』

海を越えて（前書き）

どうも、維月です。

さて、やっと旅らしくなってきました（笑）

明が、不調を訴えてます、原因は後々分かりますのでご期待を。

海を越えて

頭が、痛い。

それに、時折目もかすむ。

風邪、だろうか？

いや、そんなはずはない。

今まで、一度も雨には当たっていない。

明は、一頻りに目を擦った。

「…る、明？どうした」

「え！？」

呼ばれていたことに、気づかなかった明は、慌てて氷雨の方をふり向いた。

「お前、なんか顔色悪くないか？少し、休もうか？」

「え、いや…大丈夫だが、寝不足なんだろう、きつと」

明が苦笑ぎみに言くと、氷雨も『実は俺も何だ』と笑った。

「キユ　　ルルル…」

先を歩いているヨミが、申し訳なさそうに啼いた。

「別に、お前を責めちゃいないんだぜ？ただ、寝不足だつて言っただけなんだ」

「氷雨、それ、フォローになってないぞ」

立場のなくなったヨミは、明の上着ポケットに、潜り込んでしまった。

ポケットから顔を覗かせ、弱々しく鼻を鳴らすヨミを、明は指先で撫でてやる。

「お前のせいじゃないよ、気にするな」

村を出て、幾月かが過ぎていた。

始めのうちは数えていたが、それは、やがてすぐに、意味をなくした。

山中を歩くうちに、二人は清流を見つけ、そこで一息つくことにした。

「っ冷たい！こら、ヨミ跳ねるんじゃないっ、ほら、氷雨のそこ行つてこい」

「なっ、なんでだよ！冷てえ、こらやめろっ！」

そう言っているが、げらげらと笑いながらなので、全く説得力がない。

明は、ぶり返してきた頭痛に、一瞬顔を顰めたが、気取られないように、すぐに、表情を戻した。

「もう、早く行くぞ。日が暮れる前に山下りねえと」

「うん、おいで…ヨミ」

ヨミは、身震いして水滴を払うと、明の頭に乗った。頭が、痛い。

さっきよりも、痛みが増しているような気がする。

視界が、ぼやける。

やはり、風邪なのだろうか？

そつえば、熱っぽい気も、しないではない。

一方氷雨も、明の異変に、思いを巡らせていた。

（あの時…明の気配が変わった、あれは…間違いなく、本物の妖の気配だった。おふくろの血のせいかな？けど日中、姿は半魔のままだ、どうなってるんだ？）

二人は山を下り、砂塵の舞う、荒野を歩いていた。

すでに陽は翳り、あたりは、薄暗くなっていた。

「ん、血の匂いだ…近い」

氷雨は風の中に、濃厚な血の匂いを感じて、鼻の頭にしわを寄せた。

「氷雨！あれ見ろ、誰か倒れてるぞ！」

氷雨は、顔を上げる。

明が指をさした先には、人影が、横たわっているのが見えた。

「あれか、行くぞ明っ」

「うん」

瑰 かい (前書き)

旅の途中、一行は傷ついた老人を助けたが、その老人は、氷魚の祖父だということが分かって！？

瑰 かい

横たわっていたのは、紅い髪をした、初老の男だった。

「おい、大丈夫か！じいさんっ、しっかりしろ！」

氷雨はおそろおそろ、初老の男の肩を揺さぶった。

「あ…ああ、すまないのお、お若いの、いたた…」

男は、腰をさすりながら、立ち上がった。

「いやいや、村に戻る途中に、追い剥ぎに会ってな…困っておったんじゃ」

男の腕や足には、斬り傷がついており、傷口からは血が流れていた。
「じいさん、ひどい傷だ…斬りつけられたのか？！待ってて、いま血止め草を出すから」

腰の巾着を探る明を見た、男の表情が固まった。

「十六夜…！お前、十六夜か！？生きておったんだな？はあ…よかった、さあ、早く村に戻るべ」

手を掴む、男の力は強い。

明は、ちらりと、困惑気味に、氷雨の方を見た。

「おいおい、じいさん…ヒト違いしてねえか？こいつ、女だぞ」

「待って、氷雨。十六夜は、父さんの名前だが、じいさん…父さんを知っているの？」

「知っているとさ、なにせ、十六夜は、僕の息子なんじゃから」

「え…ええ！？」

いきなりの事実判明に、明は目を白黒させる。

「そうか、あんたが十六夜の娘か…手当てまでして貰って、ありがとうなあ、それにしても、あ奴そっくりじゃのう」

驚く明をよそに、男は明の手を握り、うんうんと頷きながら再会を喜んでいた。

「じいさんが、明の祖父殿！？」

氷雨は、狼狽する。

「明というのか、儂は魂かいという、少年は、名をなんていうのだ？」

「お、俺は氷雨だ」

「そうか、助けていただいて、すまないな…そなたらは、この先に行く宛はあるのかね？」

「いや、特には…ない、よな？」

氷雨は、明に同意を求めた。

「う、うん」

「では、どうじゃろう…儂に、恩返しを、させてはくれんかの？」

「恩、がえし？」

明は、ふにつ、と首を傾げた。

「ああ。儂の村に、招待したいと思ってな」

「構わねえけど、その村、どの辺にあるんだ？」

氷雨が尋ねると、魂は『よくぞ聞いてくれた』といわんばかりに、微笑みながら説明をし始めた。

「うむ、それ…向こうに海が見えるじゃろ？あの向こうに、儂の村がある。」

「なあ氷雨、海ってなんだ？」

「いや、知らねえけど…」

「海はな、すべての生命の源じゃよ、いま命ある者はみな、そこから来たと言われている」

「へええ、物知りだな、じいさん」

魂は、何も応えない代わりに、嬉しそうに笑った。

「しっかし、どうやってこの海を越えるかだよなあ…ん？」

「なんだよチビ、腹でもへったのか？明に団栗でも貰ってこい」

「ほう、烏兎とは好都合な」

魂が、ヨミの傍に屈むと、ヨミは困ったように、キィと啼いた。

「魂…ヨミが、どうしたの？」

問いかける、明の手の中から体を擦って、ヨミが抜け出した。

「ん？烏兎は空を飛べるんじゃないよ、知らなかったか」

明は、ヨミの方を見る。

当のヨミは、猫じゃらしによく似た、金狗尾草きんぐおのくさにじやれたりしている。

とても、そんな風には見えない。

「そうは見えないけど…」

「うーむ…では、高所から落としてみなさい、本性が現れるから」
少し間をおいて、瑰は言う。

明は、間が空いたのに疑問を持ったが、この際、考えないことにした。

「明、俺がやるうか？」

暇そうにしていた氷雨が、明に抱きついた。

「うっん、いい…下手に触ると、危険なんだ」

明は、彼の手の甲を抓り、べたつく氷雨を、ベリツと剥がして、肩を払った。

油断も隙も、あつたものではない。

「つてえ、いいよ、俺がやってやる」

抓られた手の甲を、フーフーと吹きながら、氷雨はヨミの傍に屈む。

「や、やめた方が…」

明が止めようとした瞬間、事は起こった。

「いてっ、いててっ！いてっ、て…やめるアホっ！助けてくれえ明
っ」

勢いよく、耳を振りまわすヨミ。

いわゆる、往復ビンタである。

ヨミは、鼻息荒く、再度、耳を氷雨に叩きつけた。

「ほら、だから言っただろう…ヨミ、おいで」

キィ、と啼いて、肩に飛び乗り、何事もなかったかのように、欠伸をする。

「てんめえ

依怙えいひいき鼻肩じゃねえかよっ、このっ！」

氷雨の手を、すり抜けて着地し、ヨミは、毛皮を逆立てて威嚇する。
眩暈を感じた明は、二人の仲裁に入っていく。

「その様子では、どうやら、手なづけるしかあるまい…」

魂は一本、手近な金狗尾草を手折り、ヨミの目の前に翳した。

「ほれほれ、楽しいか、ん？」

猫じゃらしに、じゃれ始めるヨミに、茫然となる氷雨。

「なっ…俺の苦労は、何だったんだよ。ま、いいケドさあ」

「カワイイ…ヨミ、嬉しそうだ。なあ氷雨」

「あ、ああ」

内心、どこがだよ、と毒づくが、楽しそうな明を見て、自然に口が動いていた。

「ほう、これが欲しいか…ならば、取ってこい！」

魂が、猫じゃらし、もとい金狗尾草を放り投げた瞬間、ヨミが変化した。

黒い巨体が、宙を舞う。

空中を飛行しながら、素早く獲物を銜えた。

「すごい、飛んだ！」

「な？飛んだだろう」

はしゃぐ明に、魂は、嬉しそうに笑う。

「おいで、ヨミ…お前、飛べるんだね」

降り立ったヨミは、喉を鳴らして、明に甘えた。

「お前、あたし達を乗せてくれる？あの、海の方」

くおん、と啼いて、ヨミはしきりに尾を振る。

どうやら、承諾してくれたようだ。

「ありがと、ヨミ…いい子だね」

瑰 かい（後書き）

どうも、維月です。 < b r > 明、不調がついにピークを迎えております。 < b r > 氷雨は、相変わらず、ヨミと仲が悪いですね（汗） < b r > ヨミの、以外にカワイイ（？）一面が… < b r > まあ、楽しんでくださいませ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0998a/>

妖幻抄 8章

2010年10月9日23時57分発行